

toyama design wave

富山で生まれる、次のデザイン。

2024



Contents

- 04 富山デザインコンペティション2024
- 05 入賞作品、入選作品
- 09 審査員講評
- 11 富山ものづくり視察ツアー
- 13 デザイン展 富山デザインコンペティション2024 作品展
- 15 ギャラリートーク
- 17 商品化プロジェクト
- 18 富山県内のデザイン関連イベント

富山県では、早くからデザインの振興に取り組み、総合デザインセンターを中心に、デザイン性に優れた商品の共同開発や販路開拓の支援、デザイン人材の育成など、幅広い取組みを進めてまいりました。

とりわけ、今回で35回目を迎えるデザインウエーブ事業は、優秀な作品の商品化を支援する「富山デザインコンペティション」を中心に、デザイン展や県内企業ツアーなど、多彩な企画を実施しています。

今回の「富山デザインコンペティション」では、近年の自然災害の頻発化を踏まえ「備える」をテーマに、暮らしの中で備えておけるデザインを募集しました。11月の公開審査会を経て、122点の中から各賞を決定いたしました。

12月に開催したデザイン展では、今回の入選作品の展示のほか、多彩なゲストを迎え、デザインの視点から生活の安心安全を改めて考えるトークイベントも開催しました。

県では、能登半島地震からの復旧・復興を最優先に取り組むとともに、富山県で暮らす人も、訪れる人も、富山

に愛着をもって関わるすべての人が幸せを実感できる「幸せ人口1000万〜ウェルビーイング先進地域、富山」の実現に向けて各種施策を展開しています。デザインの活用などクリエイティブな人材の活躍により、新たな産業や価値が創出され、そうした魅力ある富山県に引き寄せられて、さらに多様な人材が集積する、そのような好循環を目指しています。

このデザインウエーブが、デザインの新たな方向性を見出すきっかけになるとともに、クリエイティブ人材の育成などデザインの振興や産業の発展、ひいては皆様のウェルビーイングの向上に大きく貢献することを心から期待しています。

デザインウエーブ開催委員会
会長 **新田 八朗**



Schedule

6月24日～8月23日
応募登録、作品シート提出
募集テーマ「備える」(応募作品122点)

9月5日
1次審査
作品シートによる書類審査
会場：総合デザインセンター バーチャルスタジオ

9月19日
1次審査結果発表
公式ウェブサイトに入選者10名の氏名と作品タイトルを発表

11月19日
最終審査、授賞式
入選者10名によるプレゼンテーションが行われ、公開審査で各賞を決定
会場：富山県民会館304号室

意見交換会、県内企業とのマッチング会
会場：D&DEPARTMENT TOYAMA

11月20日
富山ものづくり視察ツアー
受賞者と入選者を対象に県内のものづくり産業を紹介するツアーを実施

12月17日～26日
デザイン展
「富山デザインコンペティション2024 作品展」
最終審査で選出された受賞作品および入選作品を展示
会場：富山市ガラス美術館 5F ギャラリー1

12月21日、22日
ギャラリートーク
「備える」とデザインの関わりについて考えるトークイベントを開催
会場：富山市ガラス美術館 5F ギャラリー1

2025年～
商品化、プロジェクト化
作品の商品化や新たなプロジェクト創出を推進



TOYAMA DESIGN COMPETITION 2024

募集テーマ「備える」
近年国内外で頻発する地震に限らず、豪雨や豪雪、火山活動など私たちの日常は、多くの自然災害とつながっています。
緊急避難から、ライフラインの復旧、避難所での生活や支援活動…
災害発生から刻々と変わるシーンと課題に向き合い、日々の生活の中で備えておけるデザインを募集しました。

避難に備える 暗闇に備える SOSに備える 持ち出しに備える 体の疲れに備える ケガに備える 水不足に備える 心の疲れに備える 誘導に備える 運搬に備える 家具の転倒に備える 支払いに備える 災害情報に備える 工具不足に備える 食料不足に備える トイレ不足に備える 衝撃に備える 復旧作業に備える 火事に備える 救命活動に備える 寒さに備える 収納不足に備える 物資不足に備える ペットの避難に備える 外国人の避難に備える 蚊に備える 花粉に備える 記憶の風化に備える 強盗に備える 孤独死に備える こどもの孤立に備える 感染に備える 最期に備える 除雪に備える 森林保全に備える 炊き出しに備える 脱水症状に備える 電源不足に備える 盗難に備える 認知症に備える 熱中症に備える 備蓄管理に備える 安否確認に備える 水の侵入に備える



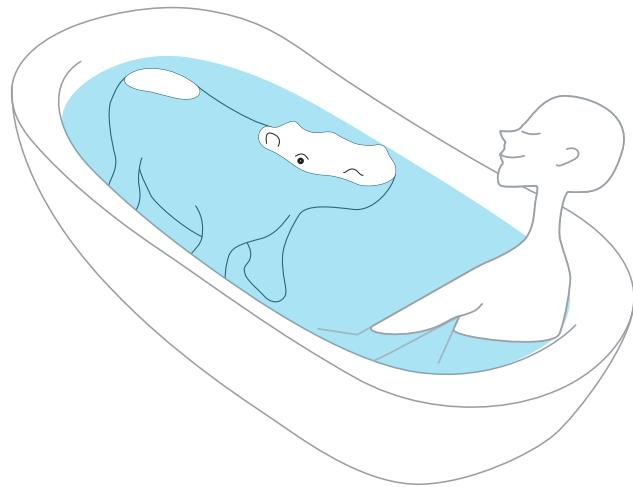
五徳から落ちづらい鍋 **準グランプリ**

阪神淡路大震災は朝食の準備を行っていた早朝に地震が発生しました。石川県能登地方で起きた地震は夕食の準備を行うであろう時間帯に発生しました。コンロの火は地震時に自動で消える仕様になりましたが、鍋などの調理器具が自らへ向かってきたり足元へ落ちてしまい火傷や怪我などを負う可能性もあります。底面に凹凸を設けることで鍋が五徳から落ちるのを防ぎ、被害に合う可能性を減らせないかと考えた調理用鍋の提案です。



堀江 勇人 HORIE Hayato

1992年生まれ。武蔵野美術大学卒業。ヒューマンコード・ジャパン株式会社チーフデザイナー。文房具、オフィス家具、セキュリティ機器、医療機器、日用品など幅広いジャンルのデザインに携わる。グッドデザイン賞ベスト100、h concept DESIGN COMPETITION 2022 グランプリなど受賞。



浮力バ **グランプリ**

「浮力バ」は、お風呂に浮かべて水を節約するだけでなく、中空部分に水を入れて生活用水を保存することも可能です。災害時や緊急時には必要な水を手軽に蓄えられ、お風呂で使用する場合には日常から節水に役立ちます。癒しと実用性を兼ね備えたこのアイテムは、安心と環境保護の両立を目指したプロダクトです。



杉本 国雄 SUGIMOTO Kunio

京都府出身、京都精華大学美術学部デザイン科建築専攻、桑沢デザイン研究所デザイン専攻科プロダクトデザインコース卒業。家電メーカー、デザイン事務所勤務を経て、デザイン事務所「INSIGN」設立。第8回家具デザインコンテスト入賞、東京手仕事プロジェクト 東京都150周年記念賞、中小企業振興公社理事長賞受賞。

ダンボール切り口加工器具 **審査員特別賞**

ダンボールは内部が空洞になっていますが、本作品は、この切り口を整えるための加工器具です。特殊形状の溝を切り口に押し付けながらスライドさせると、内部が見えなくなるように成形することができます。これにより、ダンボールの切り口で手を切る心配がなくなり、また、ダンボール製作品の外観品質を向上させることで、使い捨てのイメージがあるダンボールに新たな価値を付与することができます。



鈴木 忍 SUZUKI Shinobu

1959年生まれ。静岡県静岡市出身。愛知県在住で、長年、産業車両関係の仕事に従事した後、退職を機に令和6年度から新たな視点でダンボール関連各種プロダクトの制作を開始。

入選作品



Rib basket

災害が起こり避難所での生活を余儀なくされた際、自宅から椅子やテーブルを持ち出すことはできず、家具無しで生活することが想定されます。そこで、軽量で丈夫な、多用途に使えるプラスチック製のかごを考えました。日常生活では多用途にインテリアに溶け込み、災害時には椅子やゴミ箱のように使えたり、バケツのように水を貯めておくことができます。ラフに扱っても壊れない、屋内外での使用にも耐えるプロダクトです。



安藤 良和 ANDO Yoshikazu



森とともに循環する、薪スツール

もしもの時、薪として燃やすことができるスツール。このスツールの座面は富山の材木でできており、脚は耐熱金属で作ることで、薪受けとして使うことができます。また座面(薪)は、円形のひらき留めフレームに差し込むだけの構造とすることで、燃やしてしまっても簡単に交換が可能です。ある一定量スツールを生産し、定期的に防災訓練などで薪を消費することで、富山の森とともに循環する、あたらしい薪スツールの提案です。



板谷 優志 ITAYA Masashi



担架になるベンチ

人命救助で言われる「72時間の壁」。限られた時間で多くの命を救う為には、被災者同士の助け合い「共助」が大切です。公共空間にあるベンチが、緊急時・災害時に担架になることで、より多くの人を救う一助、備えになればと考えました。素材をアルミ押出材にしたことで、軽量さと頑丈さの両立に配慮しました。



千頭 龍馬 CHIKAMI Ryoma



茶筒なキートレイ

普段はキートレイとして使用し、筒の中に救急用品や常備薬等を保管しておくことで、災害時や日常のトラブル時にすぐに持ち出して中身を使う事ができる、身近に置いておける小さな救急箱になるキートレイです。茶筒のように静かに日常に溶け込み、備えを大切に保管することができる、毎日同じ場所に備えがあることでホッとし、さらに備えを忘れずに意識することにつながるキートレイを考えました。



松村 佳宙 MATSUMURA Yoshihiro



備えるサインボール

店舗や施設において、日常的に使用されているサインポール(誘導ポール)とパイロン(三角コーン)に着目。非常時の仮設に備える常設というコンセプトで2 in 1プロダクトにすると共に、ブティックや美術館などでの使用を想定し、できるだけ景観を壊さないデザインとした。構成しているパーツはそれぞれ分解することができ、省スペースでの収納が可能になっている。



有田ゼミ
酒井 彩名 SAKAI Ayana
小林 結 KOBAYASHI Yuu
山本 千里 YAMAMOTO Chisato
服部 綾花 HATTORI Ayaka



Reserved water Products

～生活の中に水を備蓄するプロダクトたち～

スツール/ローテーブル/ライトと備蓄用の水が入ったボトルが一体となった、身近に水を備えることが出来るプロダクトたちです。常に身近に水を備えることで、いざという時にすぐにアプローチができ、安心を生活しながら感じることができます。



SSNT
品田 聡 SHINATA Satoshi
西野 孝弘 NISHINO Takahiro



シェアする災害対策新聞紙

新聞紙は災害時に必要に応じて様々な活用ができる防災用品である。しかし、その発行部数は年々減少しており、いまやどの家庭にもあるものではなくなっている。『シェアする災害対策新聞紙』は紙面に活用方法が書かれているため、避難所の人に渡すだけで各々が必要な防災用品として活用できる。小さい子どもや外国人でも分かりやすいように、図やイラストは大きく配置し、説明文には日本語と英語を併記した。



三島 健志 MISHIMA Takeshi

審査員講評

1次審査から最終審査までを担った3人の審査員に、今年の応募作品への評価や今後のコンペティションへの期待などを伺いました。



斬新な切り口や完成度の高さを感じた今回のコンペ

最終審査に残った作品はどれもレベルが高かったと思います。ディテールまでよく考えられた、プロフェッショナルな仕事ぶりがうかがえる作品ばかりでした。とはいえコンペティションですので完成度が高ければ良いというわけではなく、新しい切り口や、想像できないようなところから発想されたアイデアに期待していました。

切り口が面白いものは往々にして着地が甘い傾向にありますが、今回はどの作品も高い完成度で提案されていた点が素晴らしかったと思います。作品は甲乙がつけ難く、どれが受賞してもおかしくない、難しい審査となりました。

被災地の状況は本当に深刻で、苦しく辛い光景が目には焼き付いて離れま

せん。しかしそんな時こそ人はユーモアや、ある種の明るさに救われたりするのではないか、という問いかけに考えさせられました。求められる機能を備えつつ、その存在自体が人に活力を与えてくれる、という意味でグランプリの「浮カバ」を高く評価しました。これが我々の日常生活に入ってきた時、どのような情景が生まれ心が揺さぶられるのか、使用シーンまでを空想させてくれる作品だと思いました。賞を逃しましたが「シェアする災害対策新聞紙」は着眼点が素晴らしく、配布方法も含めて展開の可能性を感じます。「茶筒なキートレイ」も非常用品を備えるための道具として、我々の日常の中で違和感なく魅力を発揮するものだと感じました。



安積 伸 AZUMI Shin プロダクトデザイナー、法政大学教授、A Studio Design Ltd. 代表

京都市立芸術大学卒業後、(株)日本電気デザインセンター勤務を経て、1994年Royal College of Art(英国王立美術大学)修士課程修了。その後ロンドンを拠点に1995年よりデザインユニット AZUMI として活動し、2005年 a studio 設立。T-fal(仏)やlapalma(伊)など多くの国際的企業でプロダクトデザインに携わる。FX国際デザイン賞「プロダクトオブザイヤー」(英)をはじめ国内外で数多くの賞を受賞。審査員としてもiFデザインアワード(独)、グッドデザイン賞(日)、有田国際陶磁器展産業陶磁器部門審査委員長(日)など、多くの賞に参加。代表作「LEM」スツールのV&A博物館(英)收藏をはじめ、各地の美術館に作品が收藏されている。2016年より日本に拠点を移し、法政大学デザイン工学部システムデザイン学科教授に就任。大阪芸術大学、秋田公立美術大学、京都市立芸術大学の客員教授を兼任する。

発展途上のデザインでもアイデアの強さを重視

プロとしてご活躍の出品者も多く、全体的にレベルが高かったという印象です。すぐに製品化できそうなものもたくさんあって、見応えがありました。ただ、すぐにでも製品化できそうな作品は、あえて選ばなかったということもあります。

まだ検討事項は多々あるけれども、面白いアイデアがあり、ぜひ良い製品に育ってほしいという期待感が持てるようなアイデアの強さを重視しました。賞に入らなかった作品も、その提案に魅力がなかったのではなく、ちょっとした伸び代具合が差を付けたところがあります。

今回、グランプリの選出では最後まで審査員の間で意見が分かれました。確かにグランプリに選ばれた「浮カバ」は、機能だけでなく暮らしの質を高め

るような付加価値の提案がある作品だと思います。ただ、私個人としては実用性も重視したいので準グランプリの「五徳から落ちづらい鍋」を推しました。鍋を五徳に置くことでロックされるという発想が非常にユニーク。ケトルなどにも展開できますし、地震の際に落下したりすることを防止する新しい製品規格になる可能性を秘めていると思いました。

審査員特別賞の「ダンボール切り口加工器具」ですが、目の付け所が素晴らしい。十分に商品化の可能性があると思いますので、デザイナーの方の権利もしっかり守られたらいいなと思います。商品化を前提としたコンペなので、富山をはじめとする企業がバックアップしてくれたら嬉しいですね。



塚本 カナエ TSUKAMOTO Kanae デザインディレクター、Kanaé Design Labo 顧問

三菱電機(株)、(株)GKデザイン総研広島を経て1997年、英国王立芸術大学院大学(RCA)にて修士課程修了。1999年、Kanaé Design Labo設立。2011年に東京から大阪に移転後、主とするインダストリアルクラフトの手法による日用品の開発と共に、地方発のデザインの方法(ブランディング、WEBを含む)を考察・実践。2015年より京都市在住。2021年 京都府の技報にZ世代に関する報告書を寄稿。2024年 滋賀県立大学・構想デザイン分野教授。2015～17年 京都府立大学・准教授、RCA客員講師など大学の客員教授、非常勤講師、iFデザインアワード(独)審査員メンバー、Gマーク、美濃国際陶磁器デザインコンペなどの審査員を務める。現・京都府の公設試の在り方委員会委員。京都府中小企業技術センター・デザインアドバイザー。RSAデザインコンペ(英)最優秀賞、iF(独)賞、Red Dot(独)賞、DFAアワード・銀賞、Dezeen Award/Short Listed(英)など。

デザインができる3つの方向性

今回のテーマ「備える」と聞くと、機能的でありがちな防災アイデアが多く寄せられるのではないかと感じていました。もちろんデザインの役割として機能性は基本として求められるのですが、それだけでなく被災された方が集まっている悲壮感の漂う空間に、もっと情緒的なアプローチの方法もあるのではないかと。避難所などで心を和ませてくれたり明るい気持ちにさせてくれるような、デザインが解決できるアイデアも期待していました。

日常でも便利に使えて、それが災害時にも同じように使えたり、災害時にこそ必要な機能を発揮したりするようなものが、今回の最終審査対象になったのかなと思います。そういう意味では、グランプリの「浮カバ」は、一見すると冗談のように思えるけど、実は機能や遊び心など被災地に求められる

であろう要素が集約しているプロダクトだと思って選ばせていただきました。

準グランプリの「五徳から落ちづらい鍋」は、高温の調理器具が落下して火傷や怪我の被害が発生した事例もある中で、暮らしの安全性を考えさせてくれる重要な視点です。それでいてさりげなく鍋として機能させ、加熱器具と調理器具の関係性をセットとして捉えるという広い視点も常識にとられないデザイン的な発想で新鮮でした。

審査員特別賞の「ダンボール切り口加工器具」は、シンプルで美しく安全性を確保する機能や可能性を評価しました。今後の道具としての在り方やデザインの完成度にも期待したいです。



岡 雄一郎 OKA Yuichiro 富山県総合デザインセンター デザインディレクター

金沢美術工芸大学工業デザイン学科卒業。日本電気(NEC)デザインセンター(1989-1997)、アイシン精機(1997-2016)でデザイナー、ディレクターとして勤務。2016年デザイン&デザインコンサルタント会社TUG DESIGN Inc.を設立。企画から製品デザイン、プロモーションまで総合的なデザインを手掛けている。2017年4月より富山県総合デザインセンターのデザインディレクターとして従事。主な受賞に、Milano Design Award 2016 Best Engagement by IED(伊)、iF Design Award(独)、RedDot Design Award(独)、German Design Award(独)、Design For Asia Award(港)、Good Design Best 100(日)など。

富山ものづくり視察ツアー

デザインコンペティションをきっかけとした県内産業への理解促進を目的に、受賞者と入選者が県内のデザイン関連施設を巡り、富山のものづくり産業とデザインとの取り組みを見学するバスツアーを実施しました。

○ 開催日：2024年11月20日(水) ○ 視察先：富山県総合デザインセンター、株式会社能作、富山ガラス工房、株式会社ゴールドウイン テック・ラボ



富山県総合デザインセンター

「デザイン」をキーワードに ①商品開発、②人材育成、③情報発信という3つの軸で、県内企業と地域活性化を支援する富山県総合デザインセンター。3Dプリンターや3Dスキャナーなど、県内企業の商品開発に欠かせないデザイン開発設備のほか、VR機器や映像撮影・配信設備を整備したバーチャルスタジオを視察・体験しました。(写真1)

株式会社能作

株式会社能作は、曲がる金属「錫」の製品を中心に、伝統技術と現代的デザインを融合した商品を展開し、国内外から大きな注目を集める鋳物メーカーです。ツアーでは、鋳型づくりと鋳造を行う「鋳物場」と、鋳物の表面を磨いて整える「仕上げ場」を見学。錫や真鍮の鋳物製品が出来上がる工程を間近で見ることができました。(写真2)

富山ガラス工房

ガラスをテーマとした街づくりを進める富山市で、ガラス造形作家の活動拠点となっている富山ガラス工房。吹きガラスの工房をはじめ、併設のショップやギャラリーを視察しました。工房では、ガラスに空気を吹き込み造形する工程のほか、多くの作家が作品制作に取り組む様子を見学し、産業として富山に根付くガラスの魅力を体感しました。(写真3、4)

株式会社ゴールドウイン テック・ラボ

スポーツウェアやアウトドア用品を製造販売する株式会社ゴールドウイン。ツアーでは、その研究開発拠点であるテック・ラボを視察しました。有名アスリートのユニフォームや、身体の形状や動きを計測する設備、人工たんぱく質を使用したウェア等を見学し、スポーツウェア開発の歴史と先端技術を知る機会となりました。(写真5、6)



富山デザインコンペティション2024 作品展

今回のデザイン展では、募集テーマ「備える」に対し国内外から応募のあった122点の中から、審査にて選出された受賞作品3点および入選作品7点を展示しました。
また、会期中の併催イベントとして会場に多彩なゲストを迎え、デザインの視点からあらためて生活の安心安全を考えるギャラリートークを開催しました。
○会期：2024年12月17日(火)～26日(水) ○会場：富山市ガラス美術館 5F ギャラリー1



富山デザインコンペティション2024に寄せて

「富山デザインコンペティション」は、今年で31回を数えます。日本全国から応募があり、デザイン界の登竜門として知られるようになっていきます。現在国内外で活躍する多くのデザイナーの中には、デザインコンペから羽ばたいた方々もいます。

また、富山県のものづくり産業のリソースを活かした製品を生み出すため、応募デザイナーと県内企業とのマッチングを行い、県総合デザインセンターがその仲介者となって、これまで40点を超える商品化が実現しています。

このような活動が広く全国に知れわたり、今では「デザイン先進県富山」と言われるようになりました。

これまでこの事業を支えていただいている富山県、富山市、高岡市、共催・後援団体の皆様に厚く御礼申し上げます。

デザインは生活者を豊かに導く役割を担っています。今後もデザインコンペがこの役割の一助となるべく努めてまいります。

デザインウェブ開催委員会 実行委員長
富山県総合デザインセンター 所長
桐山 登土樹

ギャラリートーク

これまで地震が少ないと思われていた富山県でも、能登半島地震の発生により防災の意識が高まっています。いつどこで発生してもおかしくない災害に、どう向き合っていけばいいのか。富山や能登との関わりが深く、様々な分野でご活躍中の方々をゲストにお招きして、それぞれの立場から災害への備え方などについてお話いただきました。

○ 会場：富山市ガラス美術館5Fギャラリー1内

DAY 1



テーマ：「日々の暮らしと備えるデザイン」

○ 日時：2024年12月21日(土) 14:00～15:30

○ ゲスト(敬称略)：

堀木 俊 建築家、株式会社隈研吾建築都市設計事務所

藤木 卓 華道家、嵯峨御流正教授、MINAMOオーナーフローリスト

林口砂里 一般社団法人富山県西部観光社 水と匠 プロデューサー

田中真紀子 ブランディングディレクター、フードディレクター

○ モデレーター：桐山登士樹

プラスアルファの考え方で生まれる価値 —— 堀木

備えるといっても、どこまで想定すればいいのか難しい。かつて設計に関わった日本酒メーカーの建物が、2018年の西日本豪雨によって被災しました。設計するときにはいろいろシミュレーションするのですが、建物に大量の土砂が流れ込むということまでは想定していません。自分の想像を超えた状況が記憶に蘇り、備えるということについて今回、改めて考えさせられました。

富山県立山町の「ヘルジアン・ウッド」という複合施設には、鉄骨構造と木材を組み合わせたイベント会場があります。木の造形は存在感があって装飾要素になりますが、実は補強するための構造材でもあるのです。積雪の多い地域ですが、鉄骨だけでも強度的には問題はありません。ただ、想定外の力が加わったときに、鉄骨が座屈したり折れたりすることを防ぐためのプラスアルファの要素なんです。よりシンプルに無駄を省いていく発想もありますが、こうしたプラスの考え方で新しい価値が生まれたら面白いですね。

常に持っておきたい気持ちの備え —— 藤木

僕の実家は富山市ですが、液状化による地盤沈下がひどかったこともあり、まず母を安全に避難させることと家の修復が優先課題でした。まだ落ち着いた生活に戻らないうちに七尾市の友人から連絡が入り、お父様が亡くなったので枕花を飾りに来てほしいと依頼されました。暗い気持ちになる状況を予想しましたが、明るい春のイメージで花を演出させていただき、とても喜んでもらえました。七尾の街は道路や建物も悲惨な状態でしたが、その友人は「僕らの世代が立ち上がらないと七尾がダメになる」と前向きだったことに救われました。僕もできるだけ力になりたいと思っています。

「備える」という災害に対する準備が本当にできているのか、実際にその状況になってみないと分からないと思います。でも、気持ちの備えはできるのかもしれない。学生時代には阪神・淡路大震災を経験し、今回は2度目の大地震だったので、常に気持ちの備えはしておきたいと思いました。

優れたエコシステムでもある散居村 —— 林口

広大な砺波平野に住居が点在する散居村についてお話します。扇状地である砺波平野は水はけの良い礫層地のため、本来は稲作に向きません。ところが、富山は三方を高い山々に囲まれ、豊富な雪解け水に恵まれているため、なんとか稲作ができました。それでも「ざる田」と呼ばれる水はけの良い田んぼの水管理をするために、水田の中に家が建てられたことで、散居が形成されていきました。家々の周りには冬の南西からの季節風を防ぐため、屋敷林が植えられました。その風景は美しいだけでなく、実は優れたエコシステムなのです。屋敷林や水田、水路などの水辺があることで、散居村の地表面の温度はアスファルトに覆われた都市部に比べ、平均で13度低いという結果が得られています。また、屋敷林や水辺は様々な生き物が暮らせる生物多様性保全に貢献し、屋敷林は砺波平野全体の風を弱め、水はけの良い水田は水害を減らしています。現代の環境変動の中、散居村は減災・防災にも役立っていることを、実は地元の私たちがあまり知らないのです。

災害に対する心の持ちようが大切 —— 田中

東日本大震災は東京で経験しましたので、今回の能登半島地震が2度目の震度5強レベルの経験でした。災害に対する備えですが、大切なのは心の持ちようだと思います。日ごろから出張でいろいろな場所を訪れるため、現地のハザードマップを必ず確認するようにしています。宿泊先から避難所までの距離や経路をチェックしたり、最大どの程度の津波が来るのか調べたり。そういう備えるという気持ちを常に持っておくことが必要なのだと思います。

もちろん個人レベルでは限界があるので、国や自治体の備えも充実させていただければ助かります。被災した友人から子どもだけでも安全な場所に預けたいと相談されたのですが、費用がかかる保育施設だと被災者としては厳しい。なんとか助けてもらえないかと私以外の人も動いてくれて、市が臨時的に対応してくれました。日本はどこで地震が起こってもおかしくない、国の制度としてもしっかり備えていただけたらいいなと思います。

DAY 2



テーマ：「備えるデザイン考、デザインの新たな役割」

○ 日時：2024年12月22日(日) 14:00～15:30

○ ゲスト(敬称略)：

鈴木啓太 プロダクトデザイナー、クリエイティブディレクター、

株式会社PRODUCT DESIGN CENTER 代表

河崎圭吾 金沢美術工芸大学 インダストリアルデザイン専攻 教授

有田行男 富山大学芸術文化学部 准教授

○ モデレーター：桐山登士樹

有事を見据えて平時を生きる —— 鈴木

震災前から能登半島にはご縁があって、地元の工芸に携わる方々を中心に交流させていただきました。震災後の能登半島とは、工芸をテーマにしたイベントの開催や工房を立ち上げるプロジェクトなどで引き続き深く関わっています。

地震や台風だけでなく、気候変動とか人口減少など、様々なリスクと隣り合わせで私たちは暮らしています。有事を見据えて、平時を生きていかなければならない。能登での活動を通じて、備えるということの重要性に気付かされた1年だったように思います。そういうと、どうしても物資の備蓄や防災インフラといったハード面の備えを想像しがちですが、実は人の繋がりとか文化の継承といったソフト面の備えが復興の支えになるのではないかと感じました。速やかな復旧活動も重要ですが、これからの能登半島をどう復興させていくのかという大きなビジョンも必要です。短期と長期の視点から、有事に備えることがデザインにおいてもカギになると思います。

長期の視点で考える備え —— 河崎

日本はプレート境界上に存在する為、日本全土で地震が起きます。能登半島地震のように、半島だらけの日本では、火災が起きても津波を警戒する必要があり消火活動が出来ないことや海岸沿いの一本道が崩れて封鎖されると電気も水道も物資も長期間にわたって復旧が難しいことがわかりました。更に悩ましい問題は、原子力の問題です。住民の反対で中止となった珠洲原発や、今回震度7を記録した志賀原発は運転停止で危機を免れています。これらの事を踏まえると、社会は短期視点から長期視点に切り替えて国民を守るためのビジョンを立てる必要があります。例えば日本周辺に空母やホテルのような設備を備えた官民連携による大型の船を回遊させ、日常的には客船、有事の際には救命や物資搬送を行う。また、人は利己的な生き物である事を理解して、ボランティア活動が自分の災害時に生かされる明確なビジョンが示されると有効です。エネルギー問題に関しても今後のAIの活用増加による電力需要の増加を踏まえて長期視点で考えていく必要があります。

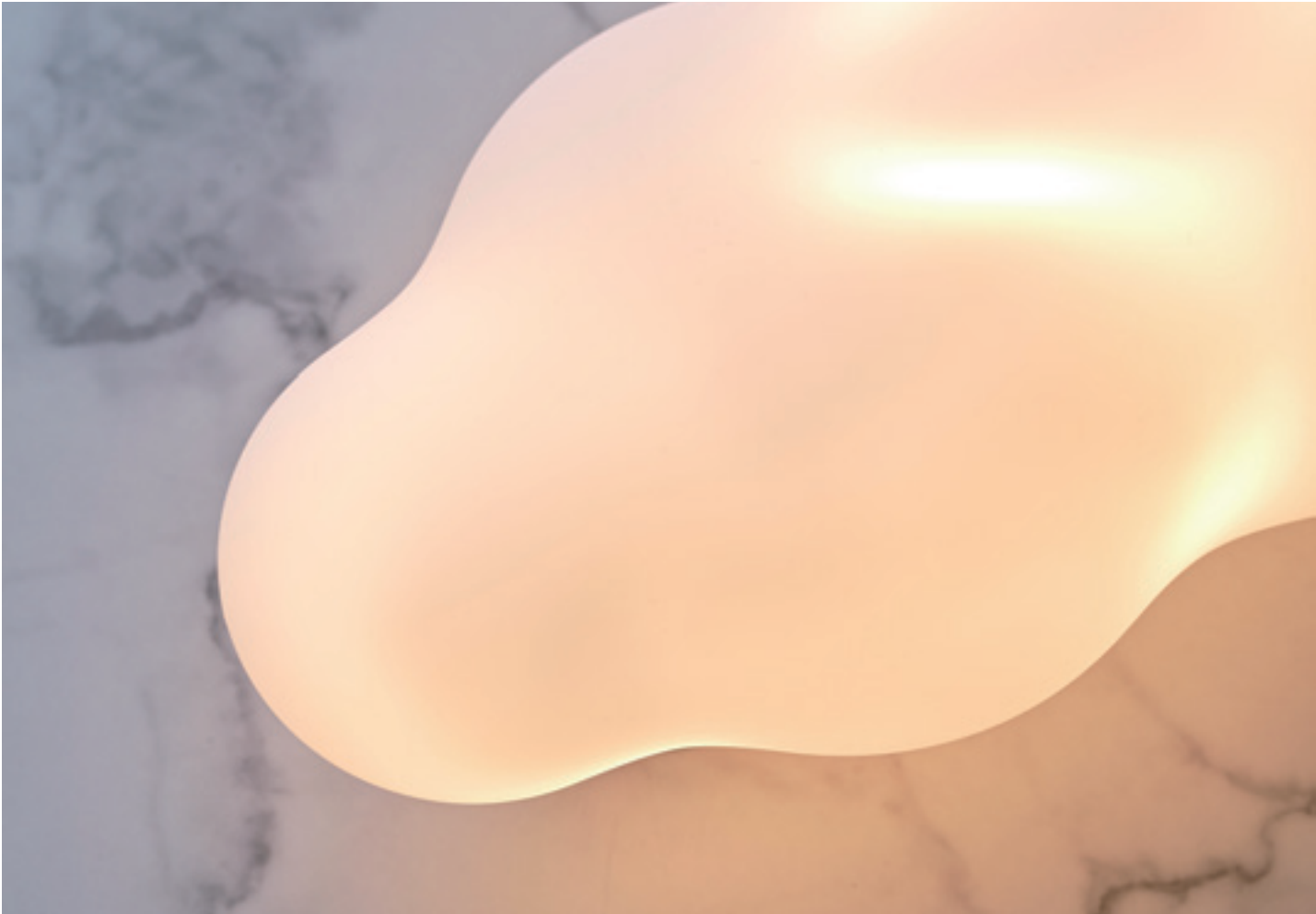
社会の動向を意識したデザイン —— 有田

能登は、半島という地理的条件もあって復興が遅れているのではないかと感じています。日本には半島や島が多いので、アクセスしにくい場所で起こる災害にも備える必要があるでしょう。また、少子高齢化で人口が減ることも考慮しなければなりません。

僕は大学院でデザインを学んでいたときに阪神・淡路大震災を経験しましたが、がれきの中に昨日まで使っていたような家電が散乱しているのを見て、デザインやものづくりに対する意識が変わりました。再利用しやすい素材や構造など、それまでとは違う視点でデザインを考えるきっかけになった気がします。震災があった今年、学生たちに何かを感じてもらいたいと思い、「備える」をテーマとした富山デザインコンペへの参加を呼びかけました。最近のグッドデザイン賞でも、社会問題に対する提案が高く評価されているケースを目にします。学生たちにも、社会に目を向けてデザインに取り組んでもらいたいと思います。

商品化プロジェクト

富山デザインウエーブをきっかけに商品化に取り組む作品を紹介します。



KUMO

富山デザインコンペティション2022 グランプリ受賞作品

「KUMO」は、富山の空に浮かぶ雲から着想を得た照明器具。古井翔真さんのグランプリ受賞をきっかけに、テーマ企業である株式会社タカギセイコーとの商品化プロジェクトを開始しました。株式会社タカギセイコーでは、より雲らしく柔らかな光を実現するため、樹脂の種類や成形条件等を検討して繰り返し試作を実施。2025年2月の東京インターナショナル・ギフト・ショーにプロトタイプを出展し、来場者からのフィードバックを得て、今後更なるブラッシュアップを予定しています。



古井 翔真 FURUI Shoma

1997年大阪府生まれ。2020年に名古屋市立大学芸術工学部を卒業。現在は電機メーカーのインハウスデザイナーとして製品デザインを担当。



富山県内のデザイン関連イベント

富山県内で開催されたデザインやクラフトに関連する各種イベントをご紹介します。



EVENT 1 市場街2024・ミラレ金屋町2024

- 会期：9月21日(土)～23日(月・休)
- 場所：高岡市内各所

富山県高岡市の山町筋エリア、御旅屋エリア、金屋町エリアなど市内の各所を会場にしたクラフト&工芸の総合イベント。市場街は今年度で13回目を迎えました。富山の伝統産業職人や作家によるアート・クラフト作品の展示・販売・ワークショップや、工房をめぐるロゲイニング、コーヒーをテーマにしたマルシェが開催されました。



EVENT 3 2024クラフトフェア「ツギノテ」

- 会期：10月19日(土)～20日(日)
- 場所：高岡市営高岡中央駐車場 5F、6F

ものづくりを未来へつなぐことを目指し、2023年から開催されている“手仕事”の祭典。富山県をはじめとした全国の伝統産業系製造業や工芸作家、地元の飲食店などが参加出展しました。会場では商品だけでなく様々な作り手たちの『技術展示』のほか、カンファレンス、ワークショップなどが実施され、人・もの・情報・技術に触れられる2日間となりました。



EVENT 2 富山デザインフェア2024

- 会期：10月4日(金)～10月6日(日)
- 場所：富山市民プラザ、デザインサロン富山

富山県内の広告デザインに携わるクリエイターによる今年度TOYAMA ADC賞の入賞・入選作品の展示のほか、全国の学生を対象としたパッケージデザインコンペティションと応募作品の展示、グラフィックデザイナー・前田晃伸氏によるセミナーなど、3日間にわたり開催されました。



EVENT 4 第64回富山県デザイン展

- 会期：11月15日(金)～17日(日)
- 場所：富山市民プラザ2F ギャラリー、アトリウム

デザイン技術の高度化と産業振興を目的として始められ、今年で64回を数えるデザイン展。富山県知事賞には、宮田裕美詠さんの「春風」が受賞しました。学生大賞には石尾心さんの「FLOWS」、学生建築デザインコンペの最優秀賞には、松本弥夢捺さん、坂本京さん、柴田碧衣さんの富山工業高等学校チームが選ばれました。



富山で生まれる、次のデザイン。

toyama design wave

発行日	2025年2月28日発行
編集・発行	デザインウエーブ開催委員会
事務局	富山県総合デザインセンター 〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク5番地 TEL. 0766-62-0510 FAX. 0766-63-6830 ホームページ dw.toyamadesign.jp
主催	デザインウエーブ開催委員会（富山県、富山市、高岡市）
共催	株式会社富山県産業高度化センター 一般財団法人富山県産業創造センター 公益社団法人富山県デザイン協会
後援	経済産業省中部経済産業局、公益財団法人日本デザイン振興会 公益社団法人日本インダストリアルデザイン協会 北日本新聞社、富山新聞社、読売新聞北陸支社 日本経済新聞社富山支局、 NHK 富山放送局 北日本放送株式会社、富山テレビ放送株式会社 株式会社チューリップテレビ
監修	桐山登士樹
編集・構成	道田有克／岡雄一郎／山田安宏／窪英明／堂本拓哉／ 吉田絵美／平野尊治／板野雄太／千田容子／溝口千賀子
クリエイティブディレクター	吉崎真弘
デザイン	柿本 萌
撮影	室澤敏晴
印刷・製本	能登印刷株式会社